

第十四回 岡山県

「内田百閒文学賞」受賞作品集

《最優秀賞》
月^{げつ}
痕^{こん}

小浦裕子

著者略歴

小浦裕子（こうら・ゆうこ）

昭和五十一年五月二十九日 広島県生

広島修道大学大学院人文科学研究科心理学専攻博士前期課程修了

職歴：（株）サンシーモールド

現職：会社員

受賞歴：第十三回 岡山県「内田百閒文学賞」優秀賞

第28回 広島市市民文芸作品 小説・シナリオ部門 1席

第27・29・30回 広島市市民文芸作品 小説・シナリオ部門 3席

広島市市民文芸作品 小説・シナリオ部門 3席

若い女は石の門を背にして立ち、もう一人の老いた女から白い包みを受け取る。何重にも巻かれたそれは、大きな繭のようだ。手から手へ渡るとき、街灯の光を受けて一瞬白く光る。若い女はその包みをささげ持つようにして、腰を曲げる。二人の足元にはさつき掘られたばかりの穴と黒々とした土の山がある。女たちの影が覆っていて、穴の底は見えない。

若い女はしゃがみ込んでその包みを穴の底へゆっくりと下ろした。老いた女もしゃがんで脇の土を包みの上に被せる。若い女もそれに倣う。半分に土がかかり、白い部分が半月のようになり、三日月のようになり、やがて見えなくなると、黒い小さな山ができた。老いた女はその土の山を手で少し押し固める。若い女は息を止めて、その光景を後ろから見つめている。

声には出さず、それぞれの祈りを土の山に降らせる。

咲が縁側で足の爪を切っている。あと何日かで臨月を迎えるお腹を抱えるようにして難しそうに足の指を持つ。お腹の丸さとは対象的に、爪切りを持つ腕は細くて長い。

タミエは古い肌着を使って布のおしめを縫っている。咲は紙おむつの方が楽だから布は使わないと、何度もタミエに言っていたのだが。

「ばあちゃん、それ一生懸命縫ってるけど、私、使わんと思うよ」

「なあに、使い出したら、案外勝手がええんよ」

「そうかもしれないけどね、使うのは私なんよ。ずっとばあちゃんが手伝ってくれるってわけでもないじゃろ」

「いつまでもおおりやあいいわ、気にせずに。陽太も帰ってこねーし」

咲が答えるまでに少し間がある。

「いいんよ、あの人は。今のうちに向こうでしっかり勉強して一人前になつてもらわないと」

「あの子はいつになったら帰ってくるんじゃったかね？」

「予定日前に一回帰ってくるって言ってたけどね」

「せいじやのうて、研修とやらが終わって日本に帰ってくるのはいつかつちゅうこと」

「一年って話だから、早くても来年の春かな」

タミエは肩を沈ませてこつそりため息をつく。どうしてうちの男どもは、みんな家に居つかないのか。製菓と製パンの専門学校を出て北区のパン屋で働き始めた孫の陽太は、二年目から家を出て一人暮らしをしていた。陽太の父の洋平も再婚してとうに家から出て行ってしまっていた。タミエにとつての一人息子である洋平は、何ヶ月も工期がある仕事を県外ですることが多く、発作を起こして倒れた妻を看取することもできなかった。陽太が専門学校へ行く年に再婚した洋平は、最初の年こそ三ヶ月に一度、二人目の妻を伴って帰って来たが、翌年からは洋平一人となり、間隔も半年に一度、一年に一度と減っていった。

家は出たものの、孫の陽太は、小学生の頃に母を亡くしてから母親代わりになったタミエのことをいつも気にかけてくれていた。まだ必要ないと断つたのに、風呂場に小さな暖房と手すりをつけたのも陽太だった。そして、家を出てから三年ほど経った春先に、陽太

「ね、今日の晩御飯、何？ お腹すいたー」

咲はいつもの調子に戻ってタミエの腕に手をかけてくる。

孫の陽太が咲を連れて来たとき、すでに陽太のフランス行きは決まっていた。勤めていたパン屋の方針で、海外の姉妹店に研修に行くことになっていることだった。陽太は自分のいない間、実家には父親しかいない咲の面倒を見てほしい、とタミエに頼むために来たのだった。

咲は陽太と並んで、白や濃い桃色の花びらが落ちた土を踏んで歩いて来た。庭には、源平桃の花が満開になっていた。一本の木に桃色と濃い桃色と白に薄い桃色の絞りが入った八重の花を咲かせるこの木は、タミエの一番のお気に入りだった。

少し前かがみになって庭に入って来た咲はふいに桃の花の方を仰ぎ見て立ち止まり、陽太に何か言った。陽太は首をかしげながら何か答えて、咲の腰のあたりを支えるように手をあてがいがい、玄関へと促した。タミエは、その陽太の手つきやいつもよりゆつくりとした歩き方を見て、座敷に上がって話を聞く前にある程度は悟ってしまっていた。

陽太はつとめて神妙そうな声色で咲を頼みたいと言った後で、これから籍を入れようと

思うのだと告げた。タミエは、しおらしく下を向いたままだった咲の少し膨らみ始めたばかりのお腹を見て、「そりゃ、またあべこべなことを」と言ってはみたが、心はずでに決まっていた。また赤ん坊を見られるという喜びは、ふつふつと沸く批判や動揺を押し込めるには十分だった。

タミエは死産の二年後に洋平を授かった。洋平が乳離れすると姑に子守を頼んで、自分のお産の時も来てくれた産婆さんの助手のようなことを始めた。まだあの頃は、姑かそれ以上の年代の者は産婆さんのことを「取り上げ婆さん」と呼んでいた。地域に一人くらいはそういった人がいて、この浜野にもいた。病院でのお産の方が多くはなっていたが、まだ家で産む者も少なからずいた。しかし、古参の者はどんどん減っていて、タミエが手伝っていた産婆さんは、呼ばれたら多少遠くても出向いて行った。タミエは産婆さんの横で手伝いはしたが、自分ひとりではお産を仕切るまでにはならなかったし、なるうとも思っただけでなかった。ただ、その場にいるということ望んだのだった。

あらゆる出産の場面があった。無事に産まれてくるが多かったが、そうでないこともあった。大きな子、細長い子、小さな子、元気に泣く子、か細い声の子、一度も呼吸をしなかった子。足から出てきた子、手の指がくっついていて子、へその緒が首に巻きつい

